第14回みんゆう新聞感想文コンクール作品紹介

世界見つめ 自分の言葉で

第14回みんゆう新聞感想文コンクールは、小学3年生から高校生まで県内70校・1238点の作品が寄せられ、審査の結果小学3・4年生の部、小学5・6年生の部、中学生の部、高校生の部の各部門で最優秀賞、優秀賞、入選及び学校賞が決まった。このうち、最優秀賞、優秀賞に輝いた16作品を紹介する。【敬称略・原文のまま】

コンクールは新聞を活用した教育事業・NIEの一環として行われた。新聞を読み解く「読む力」、得られた情報を論理的に思考する「考える力」により、広い視野と豊かな心を育んでもらうことが目的。

新聞のニュース記事をはじめ、特集記事や社説、コラム、投稿など様々な紙面を読み、感想や意見、提案などが自分の言葉で書かれた多くの作品が寄せられた。福島地区小学校教育研究会国語部長の花輪忠康福島市立余目小学校長を審査長とし厳正な審査を行い各賞を選んだ。

審査長＝花輪忠康（余目小学校長）▽副審査長＝吉川信夫（清水中学校長）▽審査員＝渋谷朋子（蓬莱東小学校）佐藤政俊（国見小学校長）深谷良子（玉井小学校）佐藤尚美（北信中学校）丸谷知野口有美（平野中学校）斎藤美佳（梁郎（県北中学校）ハドリー瞳（二本松川中学校）鈴木望友（二本松第一中学校）鈴木美紀子（県教第二中学校）丹野育庁高校教育課指導主事）孝典（福島民友新聞社編集局長）中田和宏（福島民友新聞社編集局次長）

4部門の最優秀賞

小学3・4年生の部

わたしのできることから

郡山ザベリオ学園小4年　猪狩希和子（いがりまおこ）

わたしは、よくペットボトルの飲み物を買います。この夏はもう暑で、特にたくさん買いました。そのペットボトルにも使われているプラスチックの多くは、石油を原料とし、さまざまなせい品に使用されていて、生活に欠かせないものとなっています。

しかし、その一方で、マイクロプラスチック問題など、かん境に大きな影きょうを与える事が問題になっています。わたしは、この夏、はく物館に行き、クジラの胃の中にプラスチックゴミがたくさん入っている展示を見て大変ショックを受けました。さらに、海の問題かと思っていましたが、この新聞記事を読んで、森でも同じように動物達が苦しんでいることを知りました。そこで、この記事についてもっと深く知りたいと思い調べたところ、他のデジタル新聞にものっていて、「スリランカ東部アンパラ県のゴミ捨て場では2021年までのか去八年間で約20頭のゾウがプラスチックゴミを食べて死んだ」とありました。いつも人間のぎせいになるのは弱い動物です。

プラスチックは、本当に便利です。パック容器により、水分が出てくることもなく、また色んな形に容器を変えられます。これからもプラスチックを生活からなくすことは出来ないと思います。では、少しでも海や山の動物を苦しませないようにするにはどうしたらいいか。まず、小学生のわたしでも出来ることは、きちんと分別することだと思います。そして、プラスチックではなくてもいいものは、そちらを選ぶようにして水とうを持ち運びたいと思います。また、ゴミが自分の目の前からなくなっても終わりではなく、見えないところに行っても、どこかにおし付けていないかきちんとゴミの行方を考えて生活したいと思います。

小学5・6年生の部

地球温暖化で農作物があぶない

城北小5年　渡辺結菜（わたなべゆうな）

「どうしてオレンジだけ売ってないの？」

妹はアップルジュースを買ってもらいましたが、私が飲みたかったオレンジジュースは売っていませんでした。パックもペットボトルもです。

そんな時、この新聞記事を目にしました。

なんと、オレンジの一大産地であるアメリカやブラジルで、ハリケーンや大雨によってオレンジの木がだめになってしまっていたのです。そのため、収穫量が減り、世界でオレンジ果汁の争奪戦が起きているというのです。

今まであたり前に飲んでいたオレンジジュースがしばらくは飲めないなんて、とがっかりしました。同時に、気象災害がこんなにも世界じゅうに影響を及ぼすということに驚きました。

地球温暖化による気象災害や平均気温の上昇によって、これまで収穫できていた農作物ができず、世界的な食糧危機が起こるのではないかと心配です。

昨年度の日本の食料自給率は、カロリーベースで38％だったと発表されました。6割以上を外国からの輸入にたよっているのです。

「地球沸騰の時代」とまで言われる今、気候変動への対策に全世界で取り組まなければなりません。一人の努力はわずかでも、78億人が今からすぐに取り組めば、まだ間に合うかもしれません。

ムダな電気は使わないこと。水を出しっぱなしにしないこと。余計なごみを出さないこと。子どもでも取り組めることはたくさんあるはずです。

これから何十年先もおいしいものを食べ、幸せに暮らすために、そして、地球の未来のために、できることを探し、実行していきたいです。

中学生の部

ダンセイイクキュウ

北信中2年　八巻美海（やまきみう）

イクキュウ？―「育休」という言葉も知らず首をかしげていた幼かった私も、今は、育休に関する記事を読み、こうして感想文まで書いている。それはなぜかというと、中学校に入ってから、育休という言葉をよく耳にするようになったからだ。朝テレビをつければ男性も育休がとれるようになったというニュースが流れている。家庭科の教科書には育休を取った男性の話が載っている。そうなのだ。最近の育休に関する話と言えばやはり、「男性の育休」についてなのだ。だんだん男性の育休に興味がわいてきた私が新聞で見つけた「男性育休」の四文字。この言葉の羅列を見た瞬間、読まなきゃと思った。

記事の内容はこうだ。県内で二〇二一年度に配偶者が出産した男性のうち、昨年七月末までに育休を取得した人の割合が二割を超えた―と。正直二割だけ？と思ってしまった。しかし、調査開始時の00年は0・1％だったという。そのときに比べればかなり取得率が上がったと言えるだろう。私の父は育休は取っていないという。そもそも男性が育休を取れる制度がなかったときき、社会が少しずつではあるが変わってきていることを実感した。それでもまだ、育休の取得日数は女性の方が圧倒的に長いそうだ。

私は男女平等の世の中、男性も育休をとれるのはとても良い制度だと思う。しかし、男性が育休を取ったとして、家で何を手伝えばいいか分からない人もいるのではないだろうか。それでは、余計女性の負担が増える上に、お金をかせげず家庭の生活が苦しくなるだけだ。だから私は育休取得以前の問題だと思う。例えば、男性が子育てでは具体的に何をすればいいのかを無料で学べる場を設けると良いと思う。それから、長期の休みをいきなり取るのではなく出勤時間を遅らせたり、半休を取れるようにすると良いのではないだろうか。そうすれば女性の方も小さなお願いができるようになり、少しでもストレスが減らせることだろう。

私が、育休取得以前の話の問題だと思う理由はもう一つある。それは、周りの声だ。男性が育休を取ったことにより、心ない声をかけてくる人もいるだろう。「育児は女性がするもの」「男性は働くべき」などの古い固定概念にとらわれた声はきっと職場内で存在する。でも私は思う。「社会が変わるのは常識を打ち破ったとき」だと。今までの考え方にとらわれても、何も変わらない。そのことは皆知っていると思う。ならば、私からのお願いだ。育休を取得した男性がいたら応援してあげてほしい。学生の方や子どもがいない方も日本の将来のために育休について考えてほしい。

常識を覆し、誰もが住みやすく、居心地のいい社会を、皆で、一緒につくっていこう。

高校生の部

子供と接する全ての人へ

福島商高2年　武藤花音（むとうかのん）

私は、もし自分に子供が出来たらどのような生活になってどのような母親になるのだろうと考える時がある。もちろん本当の育児をしたことはないため、どれだけ大変で苦しいものかは計り知れないが、きっと自分の子供はさぞかし可愛いんだろうなと思う。

学校の保健や家庭科の授業で虐待について学んだ。保健の先生も育児をするのはとてもつらいことだと話していた。その不安や悩みをどれだけアウトプットできるかが重要なんだなと気づいた。

私の母は、保育士をしている。そこで虐待が起きてしまう原因や対処法などを聞いてみた。母も私と同じようにどれだけ悩みを打ち明けるかが大切と話していた。だが、記事にも書かれている通り、自分の欲求を優先するあまりに子どもを放置してしまう方もいるのも事実だと話していた。それを聞いて私は、そもそも親になるという覚悟がない人が安易に子どもを作ってはいけないんだなと思った。難しいことだと思うがそれは当たり前だと思う。だが、親になるという覚悟を決めてとても真面目に向き合う人こそ虐待をするケースもあると気づいた。育児の理想を求めてしまい、自分も子どももつらい思いをする教育虐待というものだ。理想を求めてしまうとその分大きな代償がつきものだと思うので、子どもに高望みはしないでほしいなと思った。

また、母は親である自分を甘やかすのも大切だと話していた。やりたいことを好きにやる時間を作って心の余裕が出来た時に育児をする。これが簡単に出来そうでそうじゃないと感じることが出来た。

母の話を聞いて私は、この記事に少し違和感のようなものを感じた。悩みや不安を打ち明けられるしくみ作りが日本では難しいのではないか。産休や育休が取りづらかったり、幼児施設の少なさで保育園に入れない子供が続出したりしている今の日本で親の不安や悩みは途絶えないに決まっていると思う。

私の母は保育業界の人手不足について話していた。政府は待機児童を減らすだけでなく保育業界の人材の確保などもセットで考えるべきだと思う。そうすれば保育士一人一人の仕事量も減り、今まで以上に子供と向き合える時間が増えて、親も安心して子供を預けることが出来ると思う。安心して子供を預けられたら、親も好きなことが出来る時間が増えたり、仕事に集中できたりして良いのでは。

このことから私は、虐待を減らすために子供と関わる全ての人の心の余裕を作るしくみ作りを政府は徹底して欲しいと考えた。

各部門の入賞者

◇小学3・4年生の部

◆最優秀賞
猪狩希和子（郡山ザベリオ学園小4年）
◆優秀賞
壁寸仁洸（三春小3年）
久能和佳（福島大附小3年）
深田蒼介（福島大附小4年）
◆入選
前田光（蓬莱東小3年）
伊東夢結里（鎌田小3年）
久保木鴻（福島大附小3年）
斎藤柚羽（杉妻小4年）
緑川優（いわき秀英小4年）

◇小学5・6年生の部

◆最優秀賞
渡辺結菜（城北小5年）
◆優秀賞
坂内朝飛（大島小5年）
鴨原拓利（福島大附小6年）
高橋輝（桜の聖母学院小6年）
◆入選
岩渕創登（城北小5年）
半谷優貴（福島大附小5年）
関根楓真（大島小6年）
半杭泰知（八幡小6年）
福井颯（蓬莱東小6年）

◇中学生の部

◆最優秀賞
八巻美海（北信中2年）
◆優秀賞
近野七彩（郡山第五中2年）
長島和花（磐城緑陵中2年）
岡部七音（郡山ザベリオ学園中3年）
◆入選
菅野斗吾（醸芳中1年）
片岡心咲（郡山第五中2年）
阿部正紀（蓬莱中2年）
板倉帆花（平第三中3年）
野村篤也（中央台南中3年）

◇高校生の部

◆最優秀賞
武藤花音（福島商高2年）
◆優秀賞
渡辺優香（福島商高2年）
檜山穂乃花（福島商高2年）
佐藤朱璃（福島商高2年）
◆入選
渡辺みずき（福島商高2年）
渡辺莉央（福島商高2年）
高玉琉羽華（福島商高2年）
三浦愛奈（福島商高2年）
松原志奈（福島商高2年）

◇学校賞

平野小、郡山ザベリオ学園中、福島商高

審査長講評

福島地区小学校教育研究会国語部長

花輪　忠康さん

（福島市立余目小学校長）

本コンクールは、新聞記事を読み、その感想文を書くことで、広い視野と豊かな心を養うことを目的としています。本年度は、小・中・高等学校合わせて70校、1238点の作品が寄せられました。全体的に見ますと、新聞記事から興味や関心をもった題材に着目し、自らの経験や調べた情報をもとに考えを深める作品が多く見られました。日常の生活や世の中の出来事を見つめ直し、自分の考えを発信する提案性の高い作品もありました。

小学3・4年生の部ではプラスチックのごみ問題、ヤギのエコ除草、地球温暖化を防ぐクジラの生態など、環境問題について自分の生活と結び付けて考える作品がありました。また、地元で活躍する人の記事をもとに、自分の夢や憧れる職業への思いを込め、目標を目指して努力することの大切さや郷土を愛する気持ちを書く作品もありました。

深く考え広がる視野・心

小学5・6年生の部では、異常気象による果樹の不作、花粉症増加の原因、移動販売車の利便性など、新聞記事から疑問に思うことを調べ、自分の考えを深める作品がありました。また、地元のごみ排出量ワーストの問題、猛暑による野馬追開催の見直しなど、地元の問題を解決する方法について自分の考えを提案する作品も見られました。

中学生の部では、男性の育休取得、ALPS処理水放出、ネット誹謗中傷など、社会的な課題とされている問題について、複数の記事を読み合わせたり、他の情報を調べたりして、自分の考えを提案する作品がありました。

高校生の部では、子育て虐待の問題、ヤングケアラーの問題、性的多様性の見直しなど、現代的な社会の問題に着目し、解決の難しい課題や葛藤場面について理解を深め、自分との関わりの中で多面的に考える作品がありました。また、ウクライナ侵攻など世界で起こる戦争に危惧し、国際的な視野に立って世界の平和を希求する作品も見られました。

新聞を読み、さまざまな出来事に触れ、考えを深めることは、今後ますます大切になります。記事をもとに家族と話し合ったり、他の記事にあたって情報を多面的に調べたりするなど、広い視野と豊かな心を育んでほしいと思います。本コンクールのますますの発展を祈念いたします。